

2018 年度立命館附属校・提携校 社会科公開授業研究会

附属校教育研究・研修センター

8月23日(木)立命館慶祥中学校・高等学校で、社会科の公開授業研究会が開催された。中学校の授業では班単位で探求した内容を他の班に説明していく取り組みを、高校の授業では4単位の課題研究の発表を公開いただいた。他校からの参加者は少なかったが、たくさんの方の学びを学ばせていただける公開授業であった。

参加者は、立命館宇治2人、当該立命館慶祥から授業担当者を含めて11人の合計13人であった。次に内容を報告する。

(1) 研究授業

①テーマ

「社会科におけるアクティブラーニング」

②テーマ設定理由

慶祥では高校3年においてアクティブラーニングと言える科目「課題研究」に取り組んできている。また、社会科の通常科目の授業においても生徒がパッシブにならないような授業を試みている。この機会を通じて様々な意見を頂き、生徒が中心となる授業向上の知恵を共有したいと考えたからです。

③研究授業概略

研究授業	学年・場所	内 容
I	中学1年1組 中学棟1F	教材：中1地理 ヨーロッパ州 ヨーロッパ文化の共通性と多様性 (帝国書院) 授業者：山口 太一先生
II	高校3年C組 高校棟1F	教材：立命館コース文系クラスにおける課題研究の実践 授業者：菊地 賢司先生・吉田 恒先生

④研究授業 I

授業のねらい：

ヨーロッパの文化と一見異なる北海道・日本の文化を比較しながら、すでに獲得している身近な事実を用いて遠いヨーロッパの文化の共通性と多様性を学ぶ。

授業者の感想：

多くの方々から貴重な意見を頂き感謝しております。合評会で頂いた質問を活かして授業の工夫をより高めて生きたいと思いました。

授業内容：

中学1年生の一貫コースのクラスである。この学年の特徴として4月当初から「探求ノート」を1人1冊持っている。「探求ノート」とは、授業中に先生から問われた質問に自分の意見を書き、授業中に気になった語句を調べてまとめるノートである。また、授業中話し合い、それぞれの考えを先生が取り上げたいが、時間の都合上難しい場合は宿題として質問を投げる。そして、後日ノートを集めて、先生は確認することができる。4月の時点で生徒1人につき北海道にある1市町村が振り分けられ、担当の市町村について調べたことをまとめあげるためのノートでもある。

今回の授業の単元は地理のヨーロッパである。まず3人～4人で1グループになり、ヨーロッパ文化の「共通性」と「多様性」について教科書、資料集を参考に列挙し、「探求ノート」に書いていく。その後、2人が他の班に移動し、2人は自分の班に残り、それぞれが書き上げたことを1班2分間で発表する。2回目は異なる班と発表しあう。発表後、生徒は先生に発表内容を確認してもらい、「人種」と「民族」について教科書、資料集を用いて探求ノートにまとめる。班内でそれぞれが書いたことを確認しあう。最後に全体で共有する。「肌の色が違う」「顔つきが違う」など様々な意見が出た。先生による「人種」「民族」の語句整理をし、『人種』という考え方は必要でしょうか?という質問が生徒たちに投げかけられた。自然と生徒は各班で議論が行われた。そして、この質問は宿題として探求ノートに書くことになった。



北海道新聞に掲載されていた『あなたがアイヌでも気にしない』にショック』という記事をパワーポイントで写し、その記事について説明し、話し合う。そこからアイヌの伝統、風習について学んだ。2020年に完成予定の国立アイヌ民族博物館を紹介し、アイヌ語はユネスコにより「極めて深刻」な消滅危機言語に認定されている。アイヌ民族の血を受け継ぎながらもアイヌ語を話せない人もいる。そのような場合『アイヌ語』を話せなければ、アイヌ民族ということができないのか?という質問を投げて授業が終了した。その問いも「探求ノート」にまとめて来ることが宿題となった。

合評会：

グループワークが多い印象だったが、生徒たちが自分で教科書、資料集を用いて調べること、移動し、自分が調べたことを発表する、議論することに慣れている様子だった。また、先生が全体に投げた質問に対しても積極的に答える生徒が多かった。「ヨーロッパ」という単元ではあったが、「人種」「民族」を切り口に「アイヌ」にも触れ、生徒は身近に「人種」「民族」が感じられたように思った。随時探求ノートに自分の意見を書くことで思考力が深まり、2020年の入試改革で求められる「自ら考え、意見を述べる力」がつくように思った。

(記録：立命館慶祥中学校・高等学校 月館海斗)

⑤研究授業Ⅱ

授業のねらい：

生徒の発表を他の生徒とともに作り上げる。

授業者の感想：

生徒はがんばってくれた。色々な意見が聞けてよかった。

授業内容：

高校3年生立命館コースの課題研究は、週4時間実施され、いわば大学1年生時の基礎ゼミのような形態の授業で、「学習」から「学問」に向けての準備を先取りしているような内容である。また当コースの配当クラスごとに、人文・社会・国際と多様な分野で展開されているが、本授業はそのうちの、IR (International Relations) クラスの生徒のみが受講している授業である。当クラスでは、国際社会で活躍する力を養うため、多国間の問題や国際紛争など、世界で起こっている問題を自ら考え、学び、探求している。このクラスにおける課題研究のテーマも、そのような学びの内容に即したものを設定している生徒が多い。

本時では2名の生徒が、自分の設定したテーマについて研究してきたことの成果をプレゼンテーシ

ョンソフトにまとめ、教員および他の受講生に向けて発表した。発表後、生徒間での質疑応答・意見交流（質問があがり、発表者がそれに答えるという形）が行われ、その後、授業担当者からの講評そして、論文作成に向けてのいわば「研究指導」があった。



1人目の生徒の研究テーマは「ボーダーツーリズムを北海道の高校の研修に取り入れることでサハリン・北方領土への理解を深めることができるか」であった。領土問題への当事者意識が薄い北海道の高校生向けに、新しい形の研修旅行を提案し、領土問題の認知度の向上を目指すといった内容であった。発表後、提案された研修スケジュールや事後学習について、さらなる文献研究の必要性や本研究の成功事例の後に起こるであろう当事者以外の行動意識についての課題など、活発な意見交換が行われた。

2人目の生徒の研究テーマは「STEP キャンペーンを実施することにより札幌市の若年層の献血率を向上させることは可能か」であった。献血率の向上に向けてVR（Virtual Reality）を活用し、そこに北海道の観光要素を取り入れたVR療法を提案するといった内容であり、参観した教員から血液の無償提供の是非や、気候や統計データからみえる北海道特有の事象との整合性を問われるなど、こちらも活発な意見交換が行われた。（記録：立命館慶祥中学校・高等学校 小原一輝・南紀史）

合評会：

宇治高校では課題研究1コマ、探求科目2コマであり、学部連携で行っている。法学部、経済学部、文学部などと連携している。宇治高校は文理でクラス分けがあるのみ、学部と紐づかないクラス選択が可能となっている。評価の仕方は宇治高校では点数化、数値化しない。学校文化の違いを学ぶことができた。

慶祥では立命館コース文系生徒が4単位科目として履修。他の選択科目数も宇治高校より多いこと、また、慶祥では課題研究の評価において数値化することが違う。本授業は大学とのリンクが弱い、学校外部関係者とのリンクは強いことがわかった。北海道ローカルに根ざして研究活動していることが良さであると同時に大学とのさらなる連携が必要であるようにも感じられた。

本校立命館コースの看板授業である一方、添削指導など社会の授業とは異なる負担も大きい授業である。担当教員は生徒の大学の教育の土台を創っていることに責任感と誇りを感じ、授業を行っている。立命館大学、APUへ入学した卒業生の多くから大学の授業で力を発揮できると聞くことで貢献できていると感じられる授業である。今後も社会科教員が多く関わる授業であることから、課題研究と社会の授業の双方から授業実施に使える学びを生み出し、生徒に還元出来る取り組みを継続していきたい。（記録：立命館慶祥中学校・高等学校 中川善之）

（編集：附属校教育研究・研修センター 羽田澄）